「心を耕す」～百姓という生き方～

佐々木　信光

鍬を振り下ろし固い大地に刃を入れ土を耕していく。いつしか固まりはくずれふかふかと柔らかい土へとなっていく。手をかけた分、向き合った分豊かなものへと変わっていく。汗がにじみ出て通りぬけていく風が心地よい。

　農業において土とは生産装置そのままで命を育む。微生物、有機物、菌、虫、小動物など豊かな生態系が共存している。その土が固ければ作物はおもうように根を張れず上手に養分を吸い上げることはできない。しっかりと支えしっかりと養分を供給するためにはふかふかと柔らかく肥えた土が必要になってくる。今私が鍬を入れ耕さなければならないのはこの固い土だけだろうか。いや本当に耕すべきはこのこり固まった自分の心のほうではないか。このまま放っておくとさらに頑なにかちかちの心になってしまう。

うわべだけを取り繕った人間関係、いつしか本音を口に出すことすらできなくなってしまう。

　私は愛農に入り果樹部で「安心、安全でおいしい果実の生産」という目標をかかげ日々果樹と向き合っている。完全無農薬の有機栽培で日々際限なく生えてくる雑草と虫や鹿や猪やアライグマなどの害獣や病気とのかくとうの日々がつづいている。除草剤や殺虫剤を使えば楽なのは確かだが安心安全という観点からは離れてしまう。有機栽培を行っているが地球の裏側から有機質肥料を輸入しているようでは本末転倒だ。何が自然や環境にやさしく人にやさしいのか考えていかなければならない。

　果樹部に入り二２年がたとうとしている。その中で考え方、価値観はだいぶ変わったと思う。自ら考えてうごくこと、果樹園地を自分ごととしてみること、後輩に指示を出していくことなどなど、かつての自分からはとうてい考えられない今の自分がいると思う。私にとっての果樹園地はただの果物を生産するだけの場所ではなく精神的な面が大きいと思っている。たくさん悩まされ考えさせられた場所で、時に苦しく時に励まされよく働きよく遊び心休まりと言葉では言い表せないほどいろいろな要素が詰まっている場所になっている。果樹部の果物たちは何年もその地に深く根を張りたくさんの人が世話をして葛藤してきた歴史がある。その思いを受け継ぎ大切に育て次の世代へと託していきたい。環境を支配、果樹をおもいどおりに生産などごうまんにならず、そのものにとってベストな状態になるように手助けをする。あとは樹や自然の力がおいしく安心安全な果実を作っていくと思う。

　学校に行き、いい大学に行き、いい企業に就職したくさん稼ぎ、家庭を築きそこそこの幸せを得るというのが望ましいとされるこの社会。大まかに決められたレールに乗り、それにしばられて進んでいく。そんなのは嫌だ。学校では勉強や運動や容姿など何かとつけて比べられ競争をしていくということを体に覚えさせられる。いじめなどもなくならず自分より下を探して安心感を得る。ついには自らいのちを絶ってしまう人までいる。どこかグループに所属していなければ不安でしょうがなく、人の目ばかりが気になり、本当にやりたいこともままならない。自分は自分だけですでに特別なのに人の評価、劣等感、嫉妬、不安、あせりなどの頑なでこり固まった心により自分を見失ってしまう。それは大人にも共通していることで、うわべだけの浅くうすい人間関係に本音も言えない。実力、結果が求められ、ストレス、つかれがたまっていく一方で経済的には豊かだったとしても心をすりへらしお金をかせぐことは幸せなことのだろうか。それが豊かなのか。決められたレールの中では常に競争けおとし合いがあり心休まるひまもないのでは。いつしか分裂、対立、敵対につながり戦争へとも発展していく。それは心に余裕ないから、こり固まった心をほぐすことが耕すことができていないからだと思う。今私たちが本当にすべきは他人の目ばかり気にし、心をすりへらし自分を繕い自分を見失うことではなく、自分を知り弱さなど含め自分と向き合い自分をみがくことではないか。結果的に心を耕し豊かな心をつくっていくことになる。心が耕され豊かになれば自然とゆとりや心の余裕がうまれ自分のため人のために幸せを願い助け合い支え合いお互いを認め合いコミュニティをつくっていくことができると思う。心を豊かに耕す過程で人と人とのつながりは切っても切り離せないものだと思う。表面上だけの取り繕った関係ではなく、深くかかわり頑丈な絆を築くことも難しくないはずだ。競争を強いられたり、けおとし合ったり、劣等感を持つのではなく共に高め合い共存しのびのびと自分らしく子と向き合う生き方はなんと素晴らしいことか。

これからの社会を担っていく私たちはどんな環境を残していくことができるのか。型にはめようときゅうくつではみだしものをいじめるような社会ではなく、あふれる情報におどらされる社会でもなく、のびのびと自然の中を駆け巡ることができるような社会をつくっていきたい。年をとりおじさんになっても遊び心を忘れないような人になりたい。そういう社会を残していきたい。これが俺の生き様だと胸を張り進んでいこうと思う。

　私が選んだみち。農業。農業と一口に言ってもとてもひとくくりにできるようなものではない。農という道を選択しゆくゆくは仕事になるかもしれない。だが仕事というよりは農業が最終目的ではなく一つの手段として用いていきたいとおもっている。農業は人の生活の原点であり農業こそが平和をつくっていくものだと切に願っている。百姓という言葉があるがそれは百の側面を持つ百のできることがあることをも意味する。ただ農業者というだけの百姓ではなく本質的な意味での百姓になりたい。今はまだ何姓かわからないができることを誠実に切実に向き合って増やしていくことが必要になる。

　将来的には果樹を育てながらcafeを営みたいと考えている。自然豊かところで木をふんだんに使った建物ログハウスなどでcaféをやりたい。自分で作った果物でお菓子を作ったりこだわりのコーヒーや軽食などを提供したり、心から休まる笑顔あふれる憩いの空間としたい。日々仕事や人間関係で疲れた人たちにひと時の休息や非日常を味わえるような、その場を通して人と人がつながり心を通わせることができるような場所を作っていきたい。

　それこそが本質的な豊かさではないか。便利さや効率能率で、経済的な豊かさではなく大切な人たちと小さな喜びお互いを認め合うことこそ豊かな暮らしだと考える。

　愛農に入りはや3年目、なにもしなくても過ぎていく時間、気付けば卒業までのカウントダウンが始まる。土に触れ作物を育て小さな喜びを大切にしていくことが心を育て充実した日々へと結びつく。こり固まった心を少しずつほぐし心を耕し豊かにしていこう。背中で語れる人、みんなの支えとなる人、笑顔あふれる人、小さな喜びを大切にできる人、そういう人に私はなりたい。